

コロナ以降の国際交流活動

～米国の大学とのオンライン交流の事例～

西村 厚子

本稿では、共立女子大学・共立女子短期大学公開講座2023「千代田区から発信する異文化交流：コロナ以降のハイブリッド授業について」（千代田区キャンパスコンソ 共同公開リレー講座）の内容の一部を、本学文科での国際交流の事例として紹介する。

本学の文科グローバル・コミュニケーションコース（旧・英語コース）では、多様な言語や価値観を学びあうことを目的として、海外の大学や学内外の留学生と国際交流活動を行っている（西村, 2018）。コロナ禍で国際交流を取り巻く状況が一変し、1年以上新たな学内留学生が入国できない時期があり、交流活動の継続が危ぶまれたが、オンデマンドでの交流方法を手探りで模索してきた（西村, 2022）。コロナとの共存が長引く中で、2022年度後期からは徐々に留学生が戻り、対面での交流も可能となったことにより、オンラインと対面の両方の利点を活かしたハイブリッド授業に発展させている。Zoom等を利用した同時双方向型オンライン交流、クラウド上で研究発表動画やフィードバックを共有するオンデマンド型交流、教室で対面とオンラインを併用して行うハイブリッド型交流など、コロナ禍をきっかけとして、様々な交流の可能性が広がった。

本学文科において、コロナ以前の国際交流活動は全て対面形式を基本としていた。アイコンタクトをかわしながら、お互いの表情や口の動きを確かめつつ直接交流することに、大きな意義があると考えていたためである。対面の交流では、留学生とゼミ生と一緒に写真を撮ったり、時には懇親会の形で飲食やゲームを楽しみながら一つの空間で同じ時を過ごすことで、同じ人間として心から共感しあえることを実感できた。しかしながら、突然のコロナ禍で事態は一変し、2020年度から2022年度前期まで留学生が一人も入国できず、ゲストとして招聘する外国人の方も国内に殆どいない状態が続き、ゲストスピーチや交流授業をオンラインに切り替えて行うことを余儀なくされた。2022年度後期には無事に学内交換留学生が全員来日したが、今後のためにも、従来とは異なる交流方法を開拓する必要性を実感し、個人的なご縁を辿って米国の大学の日本語プログラムとの交流を実現するに至った。その結果、現在は学内留学生との対面型交流と海外の大学とのオンライン交流を併用する形で国際交流活動を行っている。筆者の担当する科目では、コロナ禍以前にもICTを活用したオンライン

学修活動に関してある程度の経験と実績があったが、国際交流活動に関しては、対面以外の形式を試みた経験がなかったため、2020年にオンライン交流を始めた当初は、教員・学生の双方にとって全てが試行錯誤の連続であった。その後も新たなオンライン・アプリケーションを取り入れるなど、毎年交流方法を更新している。

授業の実施方法には、対面授業、オンライン授業（双方向型、オンデマンド型）、ハイブリッド型授業（対面授業＋オンライン授業）、ブレンド型（対面授業とオンライン授業の組み合わせ）、ハイフレックス型（遠隔地の学生に同時中継）などがあるが、本学文科の国際交流授業では、対面型、双方向型、オンデマンド型のほか、対面と双方向型を組み合わせたハイブリッド型の授業も行った。ハイブリッド型授業には、ブレンド型とハイフレックス型があり、ブレンド型とは、授業の内容や参加者の都合に合わせて対面とオンラインを使い分ける方法で、14回授業の場合、対面が望ましい回を対面で実施し、それ以外はオンラインで実施するなどの方法がある。また、ハイフレックス型は、対面授業を遠隔地の学生にも同時中継する形式である（京都大学高等教育研究開発推進センター, 2024）。

コロナ以降、本学文科における国際交流活動は、大きく4つの種類（対面型、オンデマンド型、双方向型、ハイブリッド型）に分類され、それぞれの交流内容に合った活動形式で実施した。まず、学内の留学生（ベナン、中国、韓国、スイス、フランス）との交流（相互インタビュー、研究発表、クリスマス会）については、対面型、オンデマンド型、双方向型、ハイブリッド型を組み合わせる形で行った。また、ゲストスピーチ（対面型・双方向型）では、世界50か国（地域）の外国籍のゲストと英語で交流し、海外や日本のグローバル企業で活躍する日本人のビジネスパーソン講演も行った。上記の活動に加えて、新たに米国の大学生との交流（オンデマンド型・双方向型）を2022年度より開始したほか、千代田区内の日本語学校の協力を得て、地域の留学生との交流（対面型）にも（希望者のみ）参加している。

前述した4つの交流授業の種類のうち、対面型とは、教室にて対面で行う交流授業で、双方向型とは、テレビ会議システム（Zoom, Google Meetなど）を利用してリアルタイムにオンラインで行う交流授業である。また、双方向型オンライン交流と対面活動を併用しながら進める形式がハイブリッド型（ブレンド型・ハイフレックス型）交流授業である。米国の大学とは、Google Drive, Google Document, Padlet, YouTube等を活用して行うオンデマンド型の交流を行ってきた。上記それぞれの交流形態に利点と課題があり、交流内容に応じて適宜使い分ける必要がある。例えば、教室での対面授業は最も一般的な交流形式であるが、景気や感染拡大などの社会情勢によって安定的に実施できない場合がある。双方型オンライン交流は、渡航費用や地理的な距離を気にせずに、各国の学生たちが交流することができ、リアルタイムで臨場感のある会話のやり取りができるため、コミュニケーションの充実感や達成感をより強く実感することができる。一方、オンデマンド型のオンライン交流の利点

は、時差の問題を気にせずに行えることや、録画ビデオや文書形式のため、聞き取りにくかった点を繰り返し聞いて確認したり、ゆっくり時間をかけて読むなど、各学生のペースで学修活動を進めることができ、各自都合の良い時に視聴したり読んだりすることができる点である。そのほかアウトプットの学修活動についても、学生自身のペースでメッセージを録画したり、原稿を作成することができるメリットがある。

本学文科では、20年以上に渡って様々な国際交流を実施してきたが、上記のようなコロナ禍の経緯を経て、2022年度より新たな試みとして、米国の大学とのオンライン交流を実施したので、以下にその概要を述べる。参加者は、本学文科の英語コース（現グローバル・コミュニケーションコース）で筆者のゼミを履修する学生6名、米国の大学にて日本語プログラムを履修して2年目の学生（中級レベル）31名、米国の同大学にて日本語プログラム履修4年目（上級レベル）の学生10名である。米国の学生の専攻、学年、国籍は様々で、学部生のみならず、修士課程や博士課程の学生も含まれる。パートナー校は世界中から優秀な学生が集まる名門私立大学であるが、先方の希望にて本稿に大学名は記載しない。多様なバックグラウンドを持つ米国の学生たちとの交流は、国際語としての英語を実践する貴重な機会にもなった。各国からの留学生のみならず、米国内で育った学生たちについても、ロシア系、日系、中国系など様々な文化的背景があり、彼らが共有してくれたレポートや発表から多文化共生社会としての米国を身近に実感することができた。

今回の交流では、交流パートナーである2つの日本語クラスの各先生とご相談の上、クラスごとに2つの異なるプロジェクトを同時進行で実施した。プロジェクトA（日本語上級クラス）では、まず「外国語を学んできた中で発見した新たな自分」というテーマで、米国の学生10名と共立生6名が、Zoomの双方向型交流で1対1の対話をし、続いてGoogle Drive上でのオンデマンド型交流を行った。尚、交流は以下のような手順で進められた。

- ・米国の学生が自分が取り組んでいる内容について共立生に説明し、それに対して、内容を深められるようなコメントや質問などを共立生が返す形で対話する。
- ・Zoom対話の日程は10月に約3週間設け、各自メールなどで連絡を取り合い、双方で都合のいい日を決めて行う。
- ・記録のため、Zoom対話は米国の学生が録画して、（日本語クラスの）担当教員に提出する。
- ・米国の学生は、Zoom面談から学んだことや考えたことを元にしてレポートを執筆の上、学期末に最終稿を完成し、日本語クラス全体で共有してコメントしあう。
- ・共立生はクラウド上で米国の学生の最終稿を読み、原稿の一番下にコメントと名前を入れる。
- ・共立生は、わかりやすい/わかりにくいと思った点、英語を学んでいる自分が共感した点や自分とは違うと思った点、最終稿を読んで学んだことなどをコメントとして書く。
- ・できるだけ多くの学生と交流できるように、共立生は、Zoomで対話した学生とは異なる学生の原稿を読む。コメントは何人にしても構わない。

米国の学生たちが「外国語を学んで自分の中で変わったこと」というテーマで話すのに対し、ゼミ生には、日本人の観点で、外国語学修者としての気付きや考えを述べることが求められており、母語である日本語と学修対象である英語の両方について深く見詰め直すきっかけとなった。

プロジェクトB（日本語中級クラス）は、日本語中級の学生31名と共立生6名のオンデマンド交流として行われ、両国の学生たちが作成した動画をGoogle DriveやPadlet上で共有し、互いにコメントし合った。まず交流活動①では、米国の学生が自己紹介を含んだ動画をGoogle Drive上で共有し、共立生が返信動画を作成・共有する。それに対して、更に米国の学生が返信動画を作成・共有し、最後に共立生が米国の学生の返信動画のコメント欄にメッセージを入力する、という流れである。続いて、交流活動②では、共立生が研究発表動画をGoogle Drive上で共有し、それに対してGoogle Document上で米国の大学生がコメントを入力するというものである。交流活動③は、米国の学生が研究発表動画をPadlet上で共有し、それに対して共立生がPadlet上で動画にコメントを直接入力し、米国の学生と共有する形で行われた。

日本語中級クラスと共有したフォルダは、共立生用のフォルダと、米国の学生用のフォルダに分かれている。尚、共立アカウントのGoogle Driveはセキュリティー上の制約があり、（米国の学生など）学外者と共有できないため、異なる大学の学生同士でデータをやりとりする場合は、共有方法を工夫する必要がある。今回の交流活動では、筆者の私用アカウントを介してパートナー校とデータを共有したが、共立生は共立アカウント上でしか操作ができないなど、想定外の事象があり、一時的に学修活動に混乱が生じた。結果的には、共立生のデータのコピーを教員が私用アカウントで米国大学生と共有する、という形で何とか交流を進めることができた。

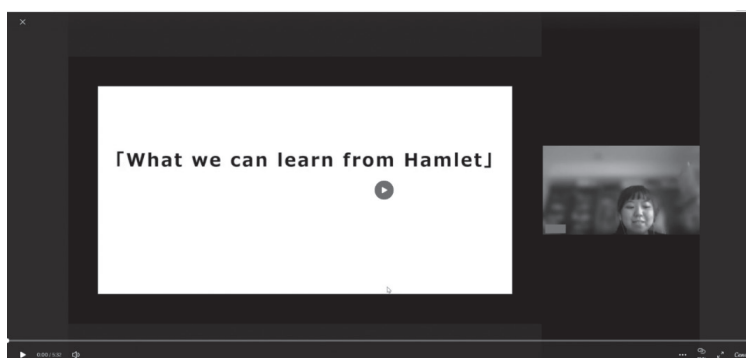
「共立生用」のフォルダを開くと、課題別にさらに3つのフォルダに分かれている。「返信動画」のフォルダでは、米国の学生の自己紹介動画を見た共立生が、自分自身の自己紹介と質問に対する回答の動画を保存し、米国の学生と共有した。米国の学生用のフォルダも課題別に分かれており、自己紹介動画では1～2分の短い動画の中で、自己紹介と共立生に対する質問が録画されている。その後、各共立生が4～5名の米国の学生のメッセージに対して返信動画を作成の上、自分の名前のフォルダに保存・共有し、宛名をファイル名とした。また、共立生からの返信メッセージに対して、米国の学生が更にフィードバックを送ってくれた。一人の共立生に対して米国の複数の学生がフィードバック動画を作成し、それらの動画データは全て、その共立生の名前のフォルダに保存・共有された。

続いて、共立生が研究発表の動画を作成し、Google Drive上のPresentationというフォルダで米国の学生と共有した。2022年度のゼミ生は、「ディズニー映画の中のジェンダー意識」「小説から学べるイギリスの結婚」「完璧な英語は存在するのか：日本の英語と世界の英語」

「アメリカで起きた差別の歴史と言語の変化」「シェイクスピアの『ハムレット』についての一考察」「国際社会における死刑制度の是非」というようなテーマで発表を行った。音声聞き取りにくい部分について、米国の学生が文字でも内容を確認できるようにするため、日本語と英語の両方で入力した発表原稿をGoogle Drive上で共有した。当初は英語版と日本語版の2種類の動画を作成する予定だったが、発表原稿やスライドの作成に想定以上の時間がかかり、2種類の動画を作成することができなかったため、英語のスライドを使って日本語で発表する動画を作成した。米国の学生は、英語のスライドで概要を把握しながら目標言語の日本語で発表を聴くことができたので、日本語中級の学生にとって適正な難易度だったと思われる。共立生は、米国の学生に日本語版の発表動画を視聴してもらった後、学期末に向けて英語版の発表を仕上げ、12月に学内留学生との交流授業にて英語の発表を行った。

卒業研究のプロセスとしては、研究調査に慣れていない短大生が英語で卒業研究を仕上げるため、1年間をかけて、まずは母語でしっかりと研究内容を深め、段階を踏んで英語での発信へと仕上げていくという形で進められた。前期は学内留学生へのインタビューを参考にしながら、日本語で研究レポートを作成し、後期に入ると、発表の第一段階として英語のパワーポイント資料を使った日本語の発表動画を作成し、Google Drive上のゼミ用フォルダで米国の学生と共有した。次の段階として英語の発表原稿を作成し、最終的に年末の学内留学生との交流授業において英語によるプレゼンテーションを実施し、それぞれ留学生から多くのコメントをもらった。

研究発表動画の一例

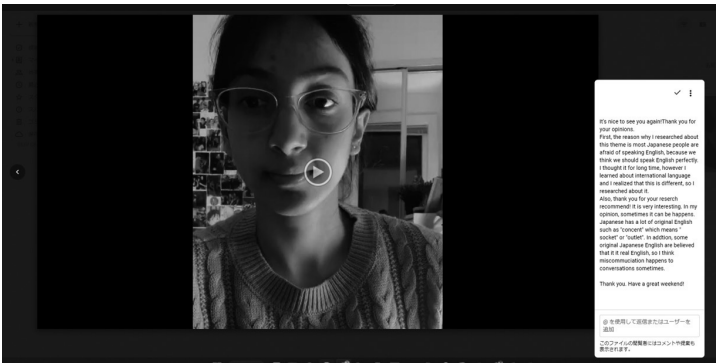


共立生の研究発表動画に対するコメントについては、両国の学生がGoogleスプレッドシートを共有し、米国の日本語中級クラスの学生4～5名が詳細かつ丁寧なコメントを英語で記入してくれた。普段の授業でテキストの英文を読むのは億劫でも、自分自身の発表について米国の学生たちが直接書いてくれた感想を読む時には嬉しそうな表情が見られた。

日本語上級クラスからは動画でコメントが届いた。自分自身の経験と照らし合わせて、共

立生の発表の共感したポイントについて米国の学生が具体的にコメントしている。また、画面右のコメント欄には、コメント動画を見た発表者の共立生からお礼と返信のコメントが入力されている。

米国の学生のフィードバック動画とゼミ生のコメント



共立生の発表動画を米国の学生が視聴した後、今度は米国の学生（日本語中級クラス）の発表動画を共立生が視聴した。以下は日本語中級クラス担当の先生から共立生への依頼文である。

日本語中級クラスの課題

Semester Project: Digital Storytelling
Topic: 「私のおすすめの○○」「○○との出会い」というタイトルで、ストーリーを作ってください。あなたのおすすめの人やモノは何か、その人やモノとどうやって出会ったか、あなたがその人やモノにどんなえいきょうをうけたか、あなたのけいけんにについて、発表してください。

Project Final Product: A 3-minute video where each student presents his/her own story using presentation slides. Each student also creates a list of new words/expressions not yet learned in class and shares the list in the description section of YouTube.

学生の作品をごらんいただき、以下2点につき、簡潔に感想を共有していただけるとうれいです。使用言語は、日本語でも英語でも好きな方をお願いします。Padletの各作品の吹き出しマークをクリックすると、"Add Comment"という欄が出ますので、こちらにコメントをお願いします。

①ビデオを見て、おもしろいと思ったこと。
②学生が文化との出会いを通して、自分の世界や視野を広げてくれた体験をレポートしていますが、共感できる点やご自身の体験など、一言お願いします。

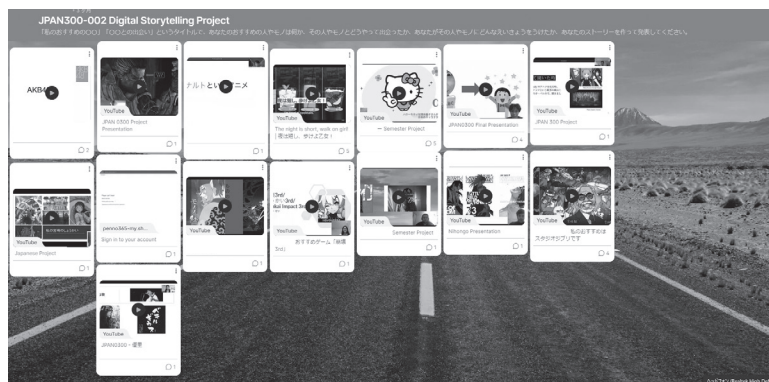
ビデオのリンク (29)

クラスセッション1	クラスセッション2	クラスセッション3
6人	15人	9人

日本語中級クラスの発表動画は、教育用オンライン掲示板Padlet上で共有し、各発表者がお気に入りのキャラクターやアーティスト、文学作品、運動選手、アイドル、アニメ、ゲームなど、日本文化との出会いや思い出についてプレゼンテーションを行った。インド系の女

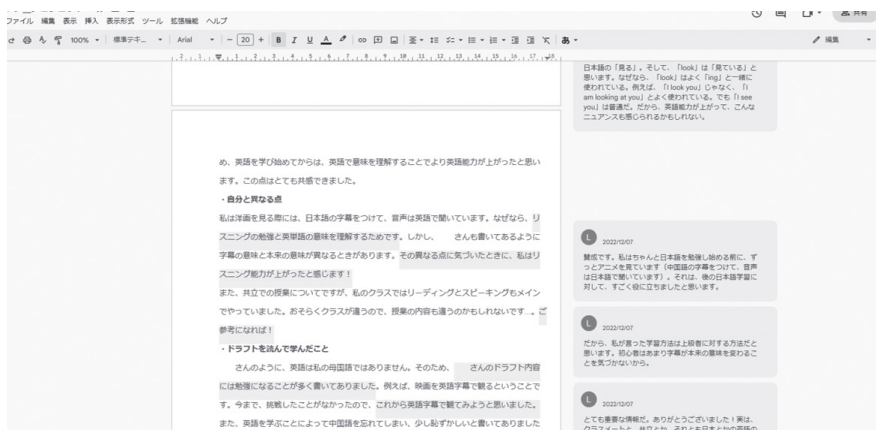
子学生が行ったハローキティについての発表では、各スライドがハローキティのイラストで可愛らしく装飾されており、キティをデザインしたケーキで誕生日を祝っている写真など、子供時代の思い出の写真を多数紹介しながら、キャラクターへの思いを語った。

Padletで米国の学生の発表動画を共有



日本語上級クラスの最終課題では、日本語を学んで自分の中で変わったことについて Google Documentでレポートを仕上げ、Google Drive上で共立生が感想を書き込み、更に米国の学生がコメント欄に返事を書き込む形でオンデマンド交流が行われた。以下の一例では、「見る」という意味の動詞である「look」と「see」の語法の違いについて、米国の学生からコメントがあり、日本人学生が英語を学修する上での気づきにつながっている。

Google Document上の相互フィードバック



米国の学生たちとの交流を通して学んだことについて、交流終了後に筆者のゼミのオンラインリッカーで共有したので数例を以下に紹介する：「初めてのZoomでの交流で、開始前はとても緊張していました。しかし、話していくうちに積極的に日本語で話してくれたり、

とても笑顔で沢山笑ってくれたりなど、直ぐに緊張がほぐれてとても楽しい時間でした。」
「米国の大学の生徒たちと交流できて本当に良かったです。まだまだ自分の英語力が伴っていないことも実感できたし、相手の日本語を学ぶ熱意がとても学ぶ上で励みになりました。交流学生全員が優しく丁寧に私に足りない英語の知識や文化を教えてくれました。特に日本語添削をした際にお話したAさんは、シェイクスピアについてよく知っていて、彼自身の学んだことを聞けたり、日本と同じようなことわざがあったのが面白く、もっとアメリカで使われる言葉を学びたいとも感じました。留学しない限り交流することのない機会だったので、とっても学びの多い交流でした。」上記コメントからは、米国の学生たちの外国語を学ぶ熱意に刺激を受け、また、英語や異文化について新たな発見をし、楽しく充実した時間を過ごすことができた様子が感じられる。

また、言葉遣いなど、お互いの学修言語について母語話者の観点から双方向にアドバイスし合い、対等に相互学修できた様子が窺われるコメントや、「不思議に感じた」とのコメントなど、今まで当然だと思っていたことについて、異なる視点の意見を聞くことにより、ゼミ生が自身の先入観を見直す機会にもなった：「質問内容や変えたほうが良い言葉遣いなどの意見を提案し合えたことがとても自分の力になったと感じます。」「Bさんの卒論は、日本人の控えめな性格を見習いたいという内容。Bさん自身は意見を積極的に言うからあまり言いすぎないように他の人の意見も尊重したい。私は逆にアメリカ人の意見を積極的に言うのは見習いたいと思っていたから不思議に感じた。」

以下の学生は、翻訳が必ずしも原文の直訳でないことへの気付きについてコメントしている。また、移民一世の母親との文化の違いについて、日本語学修を通して理解することができたというエピソードは、米国の多文化共生社会の一面について知る機会となった：「アニメが好きで日本のアニメを見ることが多く、いつもは翻訳したものを見ていたが、日本語で見ると全然違うことに気が付いたと言っていました。また、日本語や中国語を学び始めたときに、礼儀正しい表現だと気付いたと言っていました。ボディーランゲージはアメリカでもっとも大切な部分の1つ。」「Cさんの母は、もっといい生活を求め、90年代にロシアからアメリカに来ました。当時、ロシア全体貧しい人が多かった。だから、Cさんの母は、お金があれば幸せになれるとCさんに教えていました。(Cさんにはその考えが理解できなかったが)日本語を勉強したことによって、母との問題を解決したそうです。アメリカの文化と比べると、日本は上下関係を重要視する社会である。その違いは、尊敬語のような話し方ではっきり分かる。アメリカ人のCさんにとってこの考え方は変な感じがしたけど、理解することができ、Cさんの母との問題を考え直したそうです。Cさんと母親との問題は、お金が幸せかの問題ではなく、文化の違いだった。90年代のロシアでお金を稼ぐのは大変難しかったが、現代のアメリカや日本では、一生懸命働けば、いい給料が稼げる。色んな人が自分の理念を持っていることを(Cさんは)日本語学習を通して分かった。」

筆者のゼミでは、「やさしい日本語」から「やさしい英語」への導入を通して円滑な異文化間コミュニケーションを目指してきたが（伊東・西村, 2019）、以下のコメントでは、相手の気持ちに配慮しながらゆっくり分かり易い言葉で話すなど、「やさしい日本語」への気付きが感じられる。また、自分の言葉で伝える大切さや楽しさについても改めて実感した様子も見られる：「二人の学生の方と交流して共通していた部分は、日本語と英語は遠い言語であるということや、相手の気持ちを考えたり、自分の中で整理しながら話すようになったということです。これについては日本語が母国語の自分でも非常に共感した点でした。また交流する際に、私はいつもよりゆっくり話したり、シンプルな単語で話すことを心掛けました。私も、お二人のように外国語学習を頑張りたいと思いました。」「分からない日本語があったら辞書で調べ、自分の言葉で一生懸命伝えようとしてくれたこと、刺激をもらいました。」

尚、米国の学生たちの所感については、日本語クラスの先生方から以下の報告があった：「（日本語中級クラスの）学生たちは）共立生からの動画返信をととても嬉しそうに聞いていました。『authenticなcommunicationができた』『今学期に習った語彙や表現が使えた』と言って、今回の交流の機会を楽しんでいるようでした。同年代同士だと、趣味や好きなゲーム／アニメ／音楽も結構似ているようで、とても興味深かったです。中には周囲の騒音などの影響で若干聞きづらい動画もありましたが、その日のレッスンがちょうど『わかりやすい／わかりにくい』という表現が使えることが学習目標だったこともあり、共立生の動画を色々な角度から考察しながら新しい表現を使って感想を述べることにもつながりました。」以上のコメントから、日本の同年代の学生たちと直接リアルなコミュニケーションを体験したことにより、米国の学生たちが日本語を学ぶ楽しさを再認識する機会となったことがわかる。

日本語上級クラスの先生からは以下のフィードバックがあり、上級レベルの学生も興味をもって積極的に取り組み、それぞれに考えを深めることができた様子がうかがえる：「（Zoom面談について）双方に戸惑いも多少あったようですが、色々なことが学べたようです。」「（共立生の研究発表について）日本の大学生がどんなことを勉強しているのか、みんな興味津々だったようで、かなり活発にディスカッションに参加していました。」「英語を学習している日本人学生さんたちからの見解や様々な経験を聞くことができ、それによって自分の考えを深め、最終ドラフトにもそれを含めることができたという学生が多かったです。」

実際にオンライン交流を進めていく際には、様々な想定外のパブニングも起こり得るので、交流を成功に導くためには、双方の習熟度や学年歴、ICT環境等に応じて臨機応変に調整していくことが必要となる。今回の交流活動を通して、海外の大学と交流する上で必要な調整やサポートが明らかになった：①双方の語学のレベルに合った交流内容の調整、②（国によって学年歴が異なるため）交流時期の調整、③共有設定等オンライン上の操作（課題のアップロードなど）に慣れていない学生のための個別サポート、④（アクセス権限、編集権

限の設定など、技術的な問題が発生した場合のための）担当教員に対するテクニカル・サポート、⑤（日米学生間の調整がうまくいかない場合）Zoom面談の日程調整のための個別サポート。

交流活動終了後、ゼミ生たちは自分自身の卒業研究発表についての所感をオンライン・クリッカーでクラスメートと共有した。以下は死刑の是非を研究テーマにしたゼミ生のコメントである：「死刑という重めの内容でしたので、留学生や米国の大学生たちにも伝わっているのか不安な部分がありました。ですが、伝えたい内容や要点をしっかり理解し、質問や自分の国との違いを説明してくれたり、とてもうれしくなりました。死刑問題は人権に大きくかわることなので、より多くの人がこの問題に目を向ける機会が作れたらよいと思いました。私自身も、この課題を通して何が問題であるのかを真剣に考えることができ、有意義な時間だったと思います。」上記コメントから、研究発表によって自分の考えを発信できたことや、各国の学生たちに発表内容を理解してもらえたことによって、大きな達成感が得られたことが感じられる。

最後に、1年間の総括として、卒業研究や様々な国際交流活動など、筆者のゼミでの学修活動に1年間取り組んだ学生たちの振り返りを共有した：「一番大変だったのが、研究レポートでした。自分自身どのような事に興味があるか調べていくことからスタートし、図書館からたくさん本を借りたり、論文からも何個か引用したりと初めて経験することばかりでした。色んな本を読んでいると自分の考えがまとまらなくなったり結論として何を伝えたいか迷子になってしまい、何度か心が折れかけました。ですが、wordが完成し無事に発表を終えた達成感は大きかったです。次に、印象に残っているのは国際交流です。初めて外国人の方とちゃんと会話をしました。私の下手な発音の英語などが通じ会話出来たのが嬉しかったです。1年間ありがとうございました。」「留学生との交流が刺激となり、更に学びたいという気持ちが湧きました。また、英語の知識だけでなく、伝えようとする気持ちの大切さも学びました。」「今までこんなにたくさんの国際交流をしたことがなかったのでとてもいい経験になりました。研究レポートにコメントをもらって『面白かった』と言ってもらえたのが嬉しかったです。Zoomで交流したときは緊張しましたが色々な体験や考えを聞くことができて良かったです。クリスマス・パーティーでは『ワードウルフ』（ゲーム）やみんなでお話することができて楽しかったです。」「留学生との交流が何回かあったので、刺激を受けることで『もっと学ばないと』と行動を起こす勇気につながりました。また伝えようとする気持ちがあれば言語が違ってても伝わるのが分かった。」上記の振り返りから、卒業研究を通して成長した様子、留学生や米国の学生たちから様々な刺激を受けたことが伝わってくる。女子学生、特に短大生は自己肯定感の低い場合が多く見られるが、卒業研究や交流活動を通して視野が広がり、自分に自信がついたことは、学生たちの今後の人生にとって大きな財産になるであろう。以下のコメントには、「卒業後も、自分の目標に向かって頑張ってい

きたい」という前向きな気持ちが表れている：「卒ゼミの活動を通して、自分に自信がついたと思います。米国の学生さんとの交流では、英語学習についてのアドバイスをいただいたり、自身の研究レポートの意見や感想をいただけて、心配であったレポート発表も自信をもってできたと思います。また、学内の留学生の方との交流もとても良い機会になりました。中高で留学生の方との交流をしたことがなかったので、(相手の方の) 母国の国の話を聞いたりするのが面白かったです。そして日本語プログラムの学生(米国) もそうですが、留学生の方達は本当に日本語が上手で、自分も英語学習を頑張らなくてはならないとやる気が湧いてくる良い機会でした。また、ゲストスピーチでは自分の意見を英語で考えて質問したり、(海外出身の) ゲストの方の発表を聞く機会がなければ知らなかった内容もあり、この授業で自分の世界が広がったと思いました。卒業した後も、自分の目標に向かって頑張りたいです！」

今後の国際交流活動は、対面型、双方型オンライン、オンデマンド型、ブレンド型など、様々な形を状況に応じて組み合わせながら柔軟に使い分けていく方向に向かっていくと思われる (IDE大学協会, 2022)。メタバースを活用したオンライン交流など、新しい形の国際交流も、今後より普及して一般的になっていくことだろう。このように、時代の変化や社会状況に応じて様々なスタイルを使い分けていくためには、COIL (Collaborative Online International Learning) も含め、新たな形のオンライン交流やブレンド型交流について、多くの教育機関や教員がより多くの様々な事例を共有することによって、筆者のようにICTにあまり自信のない教員であっても気軽に活用できる方向に進んでいくことが望まれる。また、学内、他大学、地域の教育機関など、様々なレベルで関連機関との連携を強化し、協力関係を築いていくことも重要である。交流活動とは、交流相手の存在があって初めて成り立つものであり、それぞれの交流形式に合ったパートナーシップを複数確立しておくことは、継続的に安定した交流活動を行う上での必須事項であると同時に、最も難しい課題でもある。2022年度からは、本稿で紹介した米国の大学とのオンライン交流に取り組んでいるが、今後はジャパンCOIL協議会などのネットワークを活用して、英語圏に限らず、様々な国や地域の大学と更なる交流を進めていくことを検討している。次世代を担う学生たちが、文化や言葉の違いを超えて、グローバル化社会の中で協力しながら様々な課題を解決していく上で、学生時代の草の根の交流が、異文化間の信頼関係を築く礎となることを願って、今後も様々な試みを続けていきたい。

引用文献

- 西村厚子. 非母語話者同士の英語コミュニケーション ～現代に探るその新たな効用 浅間正通・山下巖 (編) グローバル時代のコア・ベクトル ～意外性への視線 (pp.153-161). 遊行社 (2018)

- 西村厚子. コロナ禍におけるオンライン国際交流活動 ～大学英語教育の事例 異文化間
情報連携学会論叢, 11&12, 26-33 (2022)
- 京都大学高等教育研究開発推進センター Teaching Online@京大[https://www.highedu.
kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/hybrid.html](https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/hybrid.html)
- 伊東田恵・西村厚子. やさしい日本語からやさしい英語へ 異文化間情報連携学会論叢,
10, 23-28 (2019)
- IDE大学協会. IDE現代の高等教育：ウィズコロナ時代の国際教育交流 638 (2022)